

# 博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 匹田 剛



学位申請者 阿出川修嘉

論文名 現代ロシア語におけるモダリティとアスペクトの 카테고리に関する一考察 —可能性のモダリティと体のカテゴリの相関関係について—

## 〔結論〕

阿出川修嘉氏から提出された学位請求論文「現代ロシア語におけるモダリティとアスペクトの 카테고리に関する一考察 —可能性のモダリティと体のカテゴリの相関関係について—」について論文審査と口述による最終試験の結果、審査委員会は博士の学位を授与するにふさわしい研究であるとの結論に達した。

なお、審査委員会は匹田を主査に、副査として学内より金指久美子准教授、箕浦信勝准教授、学外より中澤英彦本学名誉教授、金田一真澄慶應義塾大学名誉教授の各先生を迎え5名で構成された。

## 〔論文の概要〕

本論文は現代ロシア語における可能性のモダリティを示す述語と及びそれと結合する動詞の不定詞（不定形）の体の形式選択の相関関係を明らかにすることを目指す記述的論文というのがその第一の存在意義であると言える。可能性のモダリティを示す述語と不定詞が結合した場合の体の選択に関する「定式化」はロシア語学の歴史上、先行する文法研究でも試みられているが、未だ解決できないことが多く、本稿はそのための記述の精密化と新たな方向を提示することに大きな意味があると言えよう。

本論は章番号のない「はじめに」で本論の意義や、研究対象とするロシア語を明確化した上でその他の表記上の注意事項を整理した後、第一章「問題提起、先行研究の問題点、分析の対象とその目的」、第二章「理論的前提となる諸概念」、第三章「本研究のデータ：サンプルの収集、取捨選択及び分類」、第四章「言語現象の実態の検証、考察と解釈」、第五章「補足的考察：述語派生抽象名詞と不定詞の語結合のケース」、第六章「本稿における結論」、第七章「おわりに：今後の課題」と全7章構成で展開される。

先ず第1章では、当該問題を論じている Рассудова(1982)と Forsyth(1970)などの先行研究

を再検討し、先行研究には次のような共通する問題点があることを指摘している：

- 1) 実際のテキストにおいてどのように用いられているかに関する十分な実態の記述がなされていないか、あるいは不十分である；
- 2) 「可能性」の意味についての分類が十分にされていない；
- 3) 不定詞の語彙的意味に関する考察も十分ではなく、体系的な記述となっていない。

そしてそれらの問題点を解決すべく、一連の可能性の意味を表す述語と不定詞の結合に関して記述・考察することを本論の課題としている。

続く第2章では理論的前提とする諸概念の確認・整理を行っている。まず、Vendler(1967)などに代表されるいわゆる「状況の性質」の分類について確認し、さらに一般言語学的な視座からの「アスペクト」、Плунгян(2011, 2012)による「アスペクト」の「一次的アスペクト」と「二次的アスペクト」への分類を確認した。それによると「一次的アスペクト」は「状況」をミクロな視点で捉えるものであるのに対して、「二次的アスペクト」は「状況」の回数性・数量性を述べる際のもので、「状況」をマクロな視点から捉えるものである。一方、ロシア語の「体」についても確認を行い、「体」のカテゴリーの表す意味には「個別的意味」と「一般的意味」があるとした上で、Forsyth(1970)と Рассудова(1982)に基づき個別的意味のリストを確認している。そしてロシア語の体のカテゴリーの個別的意味としてあげられる意味は、その多くが上述の二次的アスペクトの意味であることも指摘している。

さらに第2章では本論文のもう一つの大きな研究対象である「可能性のモダリティ」のカテゴリーについても理論的確認を行っている。それによると「可能性」は「評定のモダリティ」と「非現実のモダリティ」があり、更に、「非現実のモダリティ」は「内的可能性」と「外的可能性」に大きく分類されるとしている。このうち「内的可能性」は「後天的可能性」と「先天的可能性」に下位分類され、「外的可能性」は「非義務的可能性」と「義務的可能性」に下位分類される。

また、不定詞の統語論的性質として「接語的用法」と「非接語的用法」があり、本論で問題とする述語と語結合をなす不定詞の用法は、接語的用法であるとしている。その上で、モダリティを表現する述語と不定詞からなる語結合を、否定辞の付き方によって以下の4つの「意味・統語構造」に分類して次章からの研究に備えている：

タイプ I : M - Inf

タイプ II : [M - (Neg - Inf)]

タイプ III : [(Neg - M) - Inf]

タイプ IV : [(Neg - M) - (Neg - Inf)]

続く第3章では本研究での分析を行うにあたり、利用したデータの収集方法について概

要が述べられている。本研究ではいわゆる「ウプサラ・コーパス」から収集したデータを利用しているが、本章ではウプサラ・コーパスを含む主要なロシア語コーパスの概説をするとともに、その中でウプサラ・コーパスを利用することにしたのは今回の研究で対象とする年代的側面とデータの安定性によるとの理由を述べた上で、そこから必要なデータを収集し、不要なものを排除するためにどのようなフィルタリングを行ったかが説明されている。

それに続く第4章が本研究のメインであり、上述の問題点の解決への取り組みはこの章から始まる。本章は大きく2つに分かれている。第1節では前章で示した方法により得たデータを利用して、本論の対象である言語単位が実際にどのような振る舞いを見せているか実態を明らかにし、それに基づき先行研究における記述の妥当性の検証と修正を必要に応じて行い、以下の点を明らかにした：

- ・「可能性」の意味を含む述語と不定詞が結合する場合には、不完了体よりも完了体が多く選択されている。
- ・第2章で見た意味・統語構造の4つのタイプの内、実際にはタイプIIとタイプIVについてはそもそも極めて少ない上に「内的可能性」を示す述語が用いられるケースが極めて少ないか、あるいは事実上観察されない。
- ・「内的可能性」を示す述語の内、уметь は意味・統語構造にかかわらず不定詞に一貫して不完了体を選択されるが、これは先行研究での指摘をデータ面で裏付けたことになる。
- ・一方同じ「内的可能性」でも способен だと完了体の割合が増す。
- ・外的可能性の意味を表す述語の内、невозможно はとくに顕著な特徴を示し、専ら完了体の不定詞を選択する。
- ・「非現実のモダリティ」と「評定のモダリティ」の双方を表すことができる мочь は意味・統語構造によって表されるモダリティの種類が異なっていることが明らかになった：
  - 1)タイプIは双方のモダリティが可能；
  - 2)タイプIIも双方可能だが、結合する不定詞の体によってモダリティの意味が変化する。すなわち、「評定のモダリティ」の場合は完了体、「非現実のモダリティ」の場合は不完了体、という傾向がある；
  - 3)タイプIIIは「非現実のモダリティ」のみで用いる。すなわち、タイプIIIは「非現実のモダリティ」に特化した構造である；
  - 4)タイプIVも双方のモダリティを表すことができる。
- ・Forsyth(1970)や Рассудова(1982)などで指摘されていた「不可能性」と完了体の結びつきについて検証するために、「可能性」を表すタイプIと「不可能性」を表すタイプ

Ⅲについて体の選択の割合を算出したところ、特定の述語(в состоянии, невозможно)を除けば「不可能性」と完了体の選択にはとくに相関関係が無く、極性にかかわらず可能性のモダリティの述語と不定詞が結合される際に全体として完了体の方が多いということが明らかになった。

- ・いくつかの述語に関して特徴的な振る舞いがあることが確認できた：例えば、уметь は意味・統語構造にかかわらず一貫して不完了体が多数を占め、способен は事実上タイプⅠで用いられることがほとんどで、в силах はタイプⅢでしか用いられない。また、в состоянии, в силах はタイプⅢで用いられる場合、結合する不定詞は完了体である。逆に невозможно は結合する不定詞は完了体が多数を占める。
- ・これらを総合して、以下のような傾向が導き出された：
  - 1)タイプⅠはどのモダリティの述語とも、いずれの体の不定詞とも用いることができる；
  - 2)タイプⅡは完了体だと非現実のモダリティの述語と用いることができず、不完了体だと評定のモダリティ及び非現実のモダリティの内的可能性の述語と用いることができない；
  - 3)タイプⅢは不定詞の体にかかわらず、評定のモダリティの述語とともに用いることができない；
  - 4)タイプⅣは完了体だと内的可能性の述語と、不完了体だと評定のモダリティの述語及び内的可能性の述語と用いることがない。

続く本章第2節では、新たな基準を設定して対象の分析を試みている。従来から動詞によってはどちらかの体だけに偏って用いられていることがあることは指摘されているが、本研究ではそれを数値化する試みを行い、体選択の「偏向性」を示すために「体の形態的対立のスケール」という指標を導入した。これによって専ら不完了体で用いられる傾向がある動詞を「第Ⅰ群」、完了体で用いられる傾向が強いものを「第Ⅱ群」と便宜的に分けているが、「第Ⅰ群」に属する体の形式は主として一次的アスペクトを表すもので、「第Ⅱ群」に属するものは主として二次的アスペクトを表す機能を果たしていることを見出している。

第5章では、補足的考察として可能性を示す述語から派生した抽象名詞と不定詞の語結合のケースについて考察している。これは[述語＋不定詞]の場合と[述語派生抽象名詞＋不定詞]の場合で、何らかの共通性が観察されるか否かを考える意欲的な試みである。今回の調査では、品詞が変わることで結合する不定詞の体には変化が見られないものと見られるものがあり、変化が見られるものには完了体の使用が増えるタイプもあれば不完了体の使用が増えるものがあることなどが確認されたにとどまり、あくまで試みに終わってしまった感が否めない。しかし、生成文法における X-bar 理論など形式的な観点から通範疇的な

共通性に迫る研究が多い中、意味的な方向から当該の問題に迫ろうとする試みは今後の発展に大きな期待が持てるものと思われる。

そして第6章で本論文の全体を再度見直した上で、第7章では残された課題を具体的に示している。その課題は例えば、「体の形態的対立のスケール」について；その他の特徴的な動詞について；「体の競合」をめぐる問題；様々な表現手段の平行的使用に関する問題、など具体的に述べられ、研究の今後の展望が明確に示されている。

#### 〔審査の概要及び評価〕

本論文は現代ロシア語における可能性のモダリティ表現及びそれと結合する不定詞の体の形式選択の相関関係を明らかにしようとするものであり、徹底的に記述的な研究である。可能性のモダリティを分類し、その可能性のモダリティの種類、動詞の体、動詞の語彙的意味をパラメータとしてそれらの値に応じて実際の体の選択がどう行われているかをデータによって明確にすることがその最大の目的である。当該問題に対してはロシア語学の中でも一定の先行研究が存在するものの、いずれも直感的に結論が述べられていたり、あるいはデータが不十分なものである。本研究は先行研究での不十分な成果をまず疑うことに始まり、そこで見出されたことを独自に収集したデータによって否定あるいは再確認、補強している。その記述的成果は後進にとって大きな意味があるものとして審査委員会で高く評価された。

審査委員から本論文についてとくに高く評価できる主な点として指摘されたのは以下の各点である：

- 1) 徹底的にデータに忠実で安易な一般化を行わない記述的に厳密な研究態度は好感が持てる。
- 2) 膨大なデータを集め、それを丁寧に検討したことから見出された知見は純粋に学術的な研究にとっても、また実用的な言語教育・学習にとっても大きな意義があるものである。
- 3) データの収集を電子コーパスのみに頼らず、必要に応じて母語話者からの聞き取り調査も交えて行っている点が評価できる。
- 4) 膨大な先行研究の文献を渉猟して先行研究の分析を行った第2章などは統一の見解のない1980年以降のアスペクト研究の概説的な意味も持っている。特に、モダリティの最近の研究成果をまとめた部分は興味深く、これからこの分野で研究しようとする人に大いに参考になるはずである。
- 5) 第4章第2節の「体のスケール」は今まで漠然と捉えられていた体形式の

選択における動詞ごとの「偏向」を具体的に示す試みとして興味深い。

- 6) 第5章の「述語派生抽象名詞と不定詞の語結合」は統語構造間の通範疇的な共通性に意味の面からアプローチする試みとして興味深い。今後の発展が期待される。
- 7) 第7章で「今後の課題」として示された点が多いものの、それらの多くは極めて具体的で、今後の具体的な展望が示されているものと捉えられ、むしろ評価できる。

もちろん、本論文にも改善すべき点があり、最終試験において審査委員からはいくつかの要望が出された。それらは以下のようなものである：

- 1) 用語や概念についてもう少し吟味が必要なもの、説明が必要なものが見られた。例えば、p.25にある「状況」は適切か？違和感を覚える。
- 2) 言語の意味を扱う場合、意味だけを見ることには危うさがある。明確なテストを用いるなど意味を形式によって下支えする必要も検討して欲しい。
- 3) 不定詞の体の選択の偏りについては、他の形態での偏りは同様なのか、あるいは異なっているのか。今後の課題として考えて欲しい。
- 4) 徹底的に記述的な態度は重要だが、もう少し理論的・説明的に踏み込んで欲しいと思わせる部分がある。本論文は次に続く論文の一步手前まではたどり着いている重要なデータを提供しているのだから、さらに踏み込むことを期待する。

各委員からの以上の様な指摘は、本論文の価値を高く評価した上でのものであり、いずれも形式的な整合性を求めるものか、あるいは今後の発展に向けての建設的な提言ばかりである。

また、最終試験における阿出川氏の応答は的確で、批判的なコメントについても誰よりも本人がその点を理解していることが見て取れた。さらに今後の研究の展開の方向性についても明確で具体的なビジョンがあることも見て取れた。

以上、審査委員会は、学位請求論文の内容及び最終試験でのやりとりに基づき総合的に検討した結果、申請者阿出川修嘉氏が博士（学術）の学位を授与するにふさわしいと全員一致で判断した。